

牛窓・前島散策

丸谷憲二

1 牛玉宝印

「しおまち唐琴通り」を歩いていると軒先に牛玉宝印が張ってあります。「牛玉宝印・牛玉宝印（ごおうほういん）」は、寺社の修正会・修二会などの新春の祭りで刷られ、信者に配付される護符の一種で、中世・近世には、しばしば起請文という誓約の文書の料紙にも用いられたものです。



蘇民将来（そみんしょうらい）の護符を疫病除けの守り神として家の軒先などにつるしているのは日本各地で見ることができます。京都・祇園祭はスサノヲノミコトの魂を鎮める為に行われています。京都の民家の軒先に蘇民将来子孫也と書かれた「ちまき」が飾られています。厄除けのお守りです。毎年祇園祭に新しいものと交換します。蘇明将来は人の名前です。『积日本紀』に、かつて武塔神（スサノオノミコト）が旅の途中、宿をこいしましたが、豊かな弟の巨旦将来は断りました。貧しい兄の蘇明将来は歓待しました。それに喜んだ神は、蘇明将来とその子孫を疫病から救い、巨旦将来を滅ぼしました。この逸話から蘇明将来の子孫と描いた護符を軒先に吊すと疫病から逃れられるという伝承が生まれました。しかし、軒先に牛玉宝印を張るのは牛窓のみです。牛窓にある全ての寺院が牛玉宝印を護符として配布しています。民俗学上、注目されます。

1.1 本蓮寺 牛玉宝印

経王山本蓮寺 法華宗

岡山県邑久郡牛窓町牛窓 3194 0869-34-2014



牛窓最初の法華宗の道場として、南北朝時代(1347年)京都妙顕寺座主大覚大僧正の法華堂（現本堂）建立に始まります。永享年間(1429-40)に本能寺日隆上人が西国に布教し、日暁上人を備前に派遣しま

した。牛窓の豪族石原道高が帰依し本蓮寺の開基檀越となり、法華堂を本蓮寺（日隆上人が第1世）と改名しました。現在の本堂は明応元年(1492年)の再建であり、室町様式に桃山風の装飾が取り入れられている優れた建造物です。日蓮門下各寺院の本堂として最も古く番神堂、中門と共に国の重要文化財に指定されています。江戸時代には内海を通る賓客の接遇に使われました。特に、朝鮮の国使が宿泊するための客殿は立派です。町並みの背骨にあたる万壺山の南の端にあたり、漁師町をすぐ下に見おろす高台にあり、境内からは波静かな瀬戸内の海をへだてて、小豆島の美しい島影や遠く四国の連山が展望できます。海上から観る伽藍も美しい景観を呈しています。

1.2 妙福寺 牛玉宝印

海岸山 妙福寺 観音院 別名「東寺」 本尊 千手観音 高野山真言宗
 岡山県邑久郡牛窓町牛窓 2718 0869-34-2760



報恩大師の開基とされる備前48寺・牛窓山の法統を海岸山妙福寺観音院（東寺）と室谷山金剛頂寺真光院(西寺)が法統を継ぐようです。寛文6年(1666)転退、五香宮の社地となり、元禄9年(1696)再興。

1.3 金剛頂寺 牛玉宝印

室谷山 金剛頂寺 真光院 別名「西寺」 本尊 千手観音 高野山真言宗
 岡山県邑久郡牛窓町牛窓 4032 0869-34-2157



牛窓オリーブ園の近く、室谷山麓に金剛頂寺真光院があります。備前国西大寺縁起（寛文本・1662～1672）・金陵山古本縁起第三巻に登場する名刹です。「同三年（1534年）かのへ午、快乗と云し十穀の上人有て、室山に居住ス、・・・又快乗上人は奇端多き僧にて、口に希有の語を吐、身に神変の相あらはる。・・・人皆是を感羨せずと云事なし、「希有の語」とは、「オランダ語・ハンデル語と推定」されます。「中国語やサンスクリット語」では無いと考えます。

寺伝によれば、天平勝宝年間（749－757）、報恩大師が創建した備前四十八カ寺の一つです。現在の本堂（町重文）は文化元年（1804）の再建。安置している千手観音立像（町重文）は、治承三年（1179）に建立された旧本堂の本尊。大日如来坐像（町重文）は旧多宝塔の本尊です。盛時は僧坊十一を数えたといわれます。本尊十一面観音は聖徳太子の作、脇土不動明王は智證大師の作、多聞天王は弘法大師の作と伝わっています。岡山藩が強行した寛文六年（1666）の寺院淘汰後に法灯を回復、本堂などの寺観が整備されました。真光院の前から望む瀬戸内海の景色は素晴らしく、黒島、中ノ子島、端ノ子島な

3 黒島（牛鬼島・骸島） 武内神社



黒島の初見は、1703年成立の『吉備前鏡』です。「黒島、前島の西にあり。」とあり、鼠島・黄島・青島の説明はありません。1748年成立の『吉備前秘録』に「黒島、前島の西にあり。此島に牛鬼の首落るといふ」とあり島名の命名伝説は成立していました。牛窓旧記に「牛鬼の骸（むくろ）三つの島となる。その胴体凝（こ）って、むくろじま今の黒島之なり。」とあり、『牛窓旧事記』に「牛鬼島、黒島の古名なり。別には骸（むくろ）島ともいふ。」とあります。

武内神社の祭神は武内宿命（たけのうちのすくね）です。前方後円墳の墳丘上に武内神社を祭っています。御祭神は日本初の大員として景行、成務、仲哀、應神、仁徳の五代の天皇に仕えた大政治家であり、長寿であったことから、延命長寿、開運厄除、諸災消除、家内安全、商売繁盛、大漁満足、病氣平癒、交通安全にまで幅広く崇敬されています。特に病氣平癒、交通安全には靈驗あらたかです。近くに大きな穴があり、竪穴式石室を盗掘した後だと推定されています。後円部の北側に円墳があります。全長81m、埴輪を廻らせ葺石で覆われていたそうです。湾口に浮かぶ黒島の中央丘の頂にあります。5世紀前半の築造と見られています。境内に、白髭大明神を末社としています。「髭」は口の上のひげ・うわひげを意味し、神社名に白とあるのは古代朝鮮との関係ありとの説があり、白髭大明神は新羅明神です。白キツネを祭るとされています。

4 中の小島（牛島・唐子島・カマボコ島）



左から、黒島本島、中の小島、端の小島

5 端の小島（牛島）

潮が引くと1本道でつながる不思議な無人島、干潮時には、このような道が出現します。端の小島の初見は1803年成立の吉備温古秘録に「端の小島、牛島ともいう」とあります。牛窓旧事記に「伝説牛鬼の四肢の内この島と化す。・・・この島の西方に百寿岨とて一の暗礁あり。是牛鬼の内臓凝りしなりと伝ふ。」とあります。

6 黄島（木島・鬼島）



1717年成立の備前記には「前島の南に木島と云あり。」とあります。木島が黄島に転化したものです。黄島の初見は1803年成立の吉備温古秘録です。「大島 黄島とも云 尻海村の内なり。此島の内に、當村八幡宮の末社、権現の社あり。」とあります。牛窓旧事記に「古くは鬼島と称し、中古より木島といふ。彼の牛窓伝説塵輪鬼の首凝りてこの島と化せりと伝ふ。・・・この島の西方を琵琶の首という。」とあるそうです。現在、黄島には神慈秀明会黄島支部があります。展望台もあります。

7 青島（大島・小島・小黄島・尾島）

1717年成立の『備前記』に「大島と云あり」とあります。1803年成立の『吉備温古秘録』では「小島 小黄島とも云ふ。同村島の内、弁財天社あり」とあり、1842年成立の『東備郡村志』では「大島とは今の青島の古名なり」とあります。また、「大島とは今の青島の古名なり。今も尚ほ西国の舟人は、此青島を大島と称するは古名を失はざる也。」とあります。『牛窓旧事記』に「古くは尾島とし称し、中古より木島といふ。彼の牛窓伝説塵輪鬼の尻尾凝ってこの島と化せりと伝ふ。尾は物の端なり。」とあるそうです。

8 鼠島と水鶏（クイナ）の怨み

遠方に見える小さな島が鼠島です。鼠島の初見は1717年成立の『備前記』です。「牛窓東に、鼠島、筏と云あり。」とあります。『牛窓旧事記』に「伝説の島なり。彼の鼠の死骸此所に漂着して凝って島となる。水鶏（クイナ）の怨みをもってなり」とあります。



8.1 鼠禁庄の祈願

大化2年（646）「この歳、越国の鼠、東方へ移り去るといふ。」と日本書紀にあります。この「鼠禁庄の祈願」が何を比喻しているのか。「鼠禁庄の祈願」が解読できれば前島の秘密は全て解けます。

8.2 厠の鼠と倉の鼠

天保の牛窓・前島に如何なる事件が起こったのでしょうか。牛窓郷土年表からは該当するような事故・事件はありません。天保というのは間違いです。「詩書や諸子百家の書を所蔵しているものがあれば、すべて焼き捨てましょう。」という「李斯、学に志す」、岡山藩の政策を探しました。

岡山藩の寺院整理が実施された寛文6年（1666）5月18日、光政は宗教政策の第一弾として神社淘汰の指令を出しました。神社淘汰により、氏宮601社を残す10527社が破却され、代官頭の配下である村代官の支配毎に1社の寄宮が建立されることになりました。これが「御堂の浜に鼠の大群が上陸し」の「鼠の比喻」だと考えます。この島のみ塵輪鬼伝説には含まれていません。

日本書紀の鼠に注目しました。卷第七・景行天皇記に「茲山有大石窟。曰鼠石窟。有二土蜘蛛。住其石窟。一曰青。二曰白。又於直入縣禰疑野、有三土蜘蛛。」とあります。「冬十月硯田国（おおきたのくに・大分県）につかれた、・・・この山に大きな岩窟があり、鼠のいわやと云います。二人の土蜘蛛がそこに住んでいます。一人は青といい、もう一人を白といいます。」日本書紀により「大島を青島と改名」しました。残る「鼠島は白島」となります。

「水鶏と鼠」は何を比喻しているのでしょうか。「水鶏（クイナ）の怨み」とは、何か。

「水鶏（くいな）が鳴く」とは、「鳴き声が戸を叩く音に似ること」の喩えとして使用されます。「水鶏（クイナ）の怨みをもってなり」とは、「不意打ちをくらった怨み」と解すべきです。「彼の鼠の死骸此所に漂着」ですから、「不意打ちにより死んでしまった牛窓沖合戦の戦死者の死骸が漂着した」と素直に解すべきです。日本書紀には、大化2年（646）「この年越国の鼠が昼夜相連なり、東方に移動」とあります。『日本三代実録』貞観4年（862）11月20日甲申条においては、鼠が内印の盤褥をかじったことは、触穢の人が神事に関わったことによる祟りであるとされています。

「先代舊事本紀」地祇本紀には、「こうした于（ある）日、北の方より鼠の来（まいけ）る。日（のたまは）く、汝（いまし）は隠れて物を費換（そこな）ふ。然れども、物（いきもの）の始めにして来至（まいけ）り、免（ゆるし）置く面而（のみ）。・・・「汝（いまし）は能（よ）く鼠を制（おさえ）よ。」とあります。

9 前島（塵輪島）



牛窓神社展望台から 牛窓ホテルから

9.1 唯一神道口伝次第

備前西大寺調査で南都西大寺の法統を引き継ぐ、金陵山西大寺普門坊円満院（岡山市東区西大寺）で吉田神道の「唯一神道口伝次第」を発見しました。備前西大寺成光寺（1351～1523年）・円満院の権現である荒鍬大権現（1351年初見）関連文書です。



「唯一神道口伝次第」他



荒鋤大権現

9.2 吉田神社と犬神大明神

前島には吉田神社と小森（森）神社、そして謎に包まれた備前神社 2 社、黒島に武内神社があります。仏教界には、幕府は各宗派に触頭を置かせて、法令その他の通達事項の徹底を図りました。神道界では吉田家が定める神社が触頭となり、幕府の指令が全国の神社にくまなく行き渡るようになりました。吉田神社は神道の総本山の位置を占め、江戸時代全国の祠職を傘下に吸収し祠職の裁許状を発行、絶大の権威をもっていました。その吉田神社の末社です。吉田神社の祭神は素盞鳴男命です。



吉田神社境内末社の犬神大明神に注目しました。鳥居のある小さな祠です。この犬神大明神が、林羅山の理当心地神道にとって最も重要な祭神です。大明神という神格がそれを物語ます。

林羅山の三子、林春斎の著書が「正保犬追物語」です。『由原八幡宮縁起下巻』に犬追物の説明があります。「去程に異国の凶賊悉歸伏して。敵心をなすもの一人もなかりしかば。皇后新羅国の地につき給。則大なる磐石の面に。弓のはずして。新羅の大王は日本の犬なりといふ銘を書付て。御銚を彼国の王宮の門前に立置て歸朝あり。今の世に犬追物といふ事は。異国の人民を犬にかたどりて。敵軍を射る表示也。日本官軍引退を後。末代まで国の跡なりとて。火をもちて彼石の文字を焼うしなわんとすれども。彌あざやかに成て有と申伝也。」吉田神社は 1841 年（天保 12 年）に吉田山に勧請とありますが、1841 年に吉田神社より勧請されたのは神霊社一字・素盞鳴尊一切金神のみです。1841 年以前に吉田神社・吉田神道が前島にあったと考えます。牛窓町鹿忍（かしの）沖にも、吉田神社がまつられており、祭神は天小屋根命（あまつこやね）です。京都・吉田神社の祭神の一人が天之子八根命（あまのこやね）です。天之子八根命・天小屋根命・天児屋根命、これは全て字音仮名遣いであり同一の神様です。

3 鬼の窟



前島海水キャンプ場



鬼の窟

近くに「鬼の窟」と呼ばれる塵輪鬼伝説の塵輪鬼が住んでいたとされる窟があります。

『牛窓旧事記・物草書置』に「窟中奥深くして畳数畳を敷くの広さあり。これ仲哀天皇を害し奉りし、妖怪塵輪鬼の住みし洞窟なりと伝ふ。或は前島を塵輪島と呼ぶ所以ならんか。」とあります。「牛窓独自の塵輪鬼伝説は吉田神道による創作」と考えます。

① 牛窓独自の塵輪鬼伝説による「塵輪島・前島」には、一番重要な遺跡がなければならない。

前島にある神道史上、最も重要な遺跡は吉田神社である。

③ 塵輪鬼が住んでいたとされる窟を見下ろせる高台、吉田山にある神社である。

牛窓独自の島名の命名伝説では「黒島・青島・黄島」のみであり、「赤島・白島」が無くて陰陽五行思想が薄らいでいること。塵輪鬼伝説がホキ内伝巻二の盤牛大王説話をベースにして創作されたと考えます。吉田家は朝廷に仕え陰陽寮において占いをつかさどる古い家柄でした。

9.3 小森（森）神社

小森神社、あるいは「森神社」と呼ばれています。前島の地神とされております。



9.4 前島 備前神社二社 古墳上の神社

二つの備前神社があります。小さな祠です。服部一族の氏神様（牛窓神社 岡崎宮司談）です。



備前正義神社



備前正高神社

- ① 立石古墳（消滅）上にあるのが、備前正義神社です。勾玉と刀が発掘されました。
- ② 清水池古墳（消滅）上にあるのが、備前正高神社です。石室内より人骨が発見されました。

吉田神社に関連する四つの神社が全て古墳上に建てられています。備前神社の「備前」は朝廷の官職名です。「備前の守」です。早田玄洞説の「前島に幽閉したことを、島になって残ると言い伝えたものであろう。」は、注目すべきです。刈屋栄昌氏の口碑聞書帳の中に「前島に塵輪宮があるとの事だが其の位置は不明である。」も合わせて検討すべきです。現在の吉田山へは 1841 年（天保 12 年）に、備前神社のある場所より移転したと考えます。移転には鼠伝承があります。前島トレッキングマップに、「天保年間、御堂の浜に鼠の大群が上陸し、民家や畑があらされる事件がありました。島民は鼠禁圧の祈願のため、天保 12 年 8 月 1 日に下の庵の地に建立祭神していましたが、後にこの地に移したと伝えられています。」とあります。

10 清正公大神祇と松雲太師



南無清正公大神祇



加藤清正



松雲大師

小森神社の近くに、清正公石碑があります。加藤清正(1562～1611年)は、豊臣秀吉の命により、文禄元年(1592)と慶長元年(1596)の2度の朝鮮の役に従軍しました。戦車の祖型ともいえる亀甲車の採用など挿話も多い武将です。また、熱烈な日蓮宗信者として領内に日蓮宗寺院建立をすすめ、一方キリシタン弾圧を強めています。

しかし、なぜ前島に南無清正公大神祇との石碑があるのでしょうか。その理由は、朝鮮通信使の先駆けとなった松雲大師にあります。1592年からはじまった豊臣秀吉の朝鮮侵攻によって、日朝両国の国

交は断絶しました。松雲大師は、西生浦の倭城で加藤清正との講和交渉を担当し外交僧としての名声を高めました。1598年8月に秀吉が死去し戦争は終結しました。1604年、松雲大師は京都・伏見城で徳川幕府と交渉し1607年から1811年までの200年間に12回の平和交流の象徴である朝鮮通信使の基盤を築き、1610年67歳で生涯を閉じました。信義を通わせる外交を貫き平和への道を築きました。その信義が前島の「南無清正公大神祇」です。大師は本法寺に滞在して日本の五山僧とまじわり、日朝文化交流のさきがけともなりました。松雲大師の銅像は大韓民国 富川市 奨忠壇公園にあります。松雲大師の行動が日韓友好関係形成の礎となりました。

11 参考文献

- 『牛窓風土物語』 刈谷栄昌著 昭和48年 日本文京出版
岡山文庫197『牛窓を歩く』 前川満 日本文京出版
『全訳現代文 日本書紀上巻』 宇治谷孟 1986年 創芸出版(株)
『牛窓郷土年表・自原始社会至大正末期』 刈屋栄昌 1966年 牛窓郷土研究会
『史上の吉備 上編』 早田玄洞 大正15年 山陽新報社
『民話集 牛窓夜話 前編』 刈屋栄昌 昭和33年 牛窓郷土研究会
『牛窓町古墳図』 平成14年 牛窓町教育委員会
『牛窓町史 民俗編』 平成6年 牛窓町史編纂委員会